

中東の政治変動（仮）

2010年末に始まった「アラブの春」に象徴されるように、中東は大きな政治変動を経験している。実に半世紀以上にわたって中東地域の政治を特徴付けてきた独裁／権威主義体制は、既にそのいくつかが市民社会の「下から」の圧力によって崩壊した。だが、これからの中東諸国が民主主義の定着へと向かうのか、それとも新たな独裁／権威主義体制を生むのか、あるいは外部介入や内戦によって破綻国家へと変貌するのか、いまだに不透明なままである。

今日の中東の政治変動は、第一義的にはチュニジアやエジプトといった国別の内政問題、とりわけ革命や民主化の過程としてとらえられる。だが、実際にはリビアやシリアのケースが象徴するように、各国政治の帰趨は国際政治の動態と強く結びついている。中東はイスラームや膨大な天然資源といった独自の特徴を有しながらも、その政治が自己完結するような「箱庭」などではなく、J・C・ブラウンがかつて論じたように、実際には冷戦の最中から他の地域と同様か、あるいはそれ以上に国際政治が深く「浸透（penetrated）」した地域であると考えることができる。

事実、2001年の9.11事件からの10年間で、中東地域の政治は、それをとりまく国際政治とともに大きく変化してきた。2003年の「イラク戦争」（の失敗）を境に米国のヘゲモニーは後退し、その空隙を埋めるように中国やロシアがプレゼンスを高めた。「イスラームとの戦い」と「テロとの戦い」による暴力の連鎖が飽和点に達した結果、アル=カーイダに代表される急進的なイスラーム主義組織が支持者を急速に失った一方で、穏健なイスラーム政党が穏健な政策を打ち出すことで存在感を高めた。新自由主義的なグローバリゼーションの拡大・浸透は、社会主義的な経済政策をとってきた非産油国を翻弄した一方で、産油国を莫大なオイルマネーで潤した。衛星放送やソーシャルメディアの普及が市民社会のエンパワーメントを促しただけではなく、国境を越えるかたちでの熱狂や共鳴を生み出している。

こうした現実に鑑みると、今日の中東の政治変動は国内政治の実証研究に加えて、国際政治の変化のなかで論じることが重要であろう。

中東の政治変動をどのように論じることができるのか、そして、そこからどのような理論的なインプリケーションを引き出すことができるのか。本特集では、これを共通の課題に設定した上で、中東各国の政治を対象とする地域研究や(比較)政治学だけではなく、IR、IPE、外交史研究、社会運動研究、軍事・安全保障研究、メディア研究などの様々なアプローチにおいて、従来の方法論、手法、仮説、データなどの到達点と課題を踏まえながら、研究上の新たな地平を拓こうとする意欲的な論文を広く募集したい。

論文の応募を希望される会員は、論文のテーマと要旨を600－800字程度にまとめたもの

を、自宅・勤務先の住所・電話・FAX・メールアドレスを明記した上で、2013年7月31日までに編集責任者へメールでお送りください。本特集号の全体構成などについて、地域と歴史、理論のバランスを総合的に検討した上で、執筆をお願いする方には、2013年8月31日までにご連絡いたします。なお、論文の最終提出の締め切りは、2014年3月31日、論文の分量は注を含めて2万字以内とします。また、最終的な掲載の可否は論文提出後に査読を行った上で決定しますので、この点を含めてご了承ください。

執筆要領については学会ホームページをご参照ください。要領を遵守してのご執筆をお願いいたします。

<http://jair.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/documents/shippitsuyoryo.pdf>

お申し込みやお問い合わせは、以下の編集責任者までお願いいたします。

《編集責任者》 末近浩太

《連絡先》 〒603-8577 京都府京都市左京区等持院北町 56-1 立命館大学国際関係学部

電話： 075-466-3401（研究室直通）

E-mail: suechika★ir.ritsumei.ac.jp

(★を@に置き換えてください)

---